

# 狐火

水谷年惠

あはれにも明滅すなり眞夜中のあはれは狐火大川堤。

私の詠みました此の腰折の大川堤は、濃尾平野を北から南へ流れる日光川の堤であります。

春が来ると、黄金の頭巾を被つた蒲公英や、紗の袴を穿いた土筆ん坊で、西と東の堤が彩られます。春風と連立つて流れる豊かな水が、兩岸の蘆の芽を、いたはるやうにひたひたと音をたてて撫でて行きます。その蘆の芽が伸びて茂つて、夕風に爽かな音を作つて鳴る頃になると、螢が飛んだり、すいつちよんが歌つたりします。狐が火をともし、兩側の堤を行きつもどりつするのは、此の春から夏へかけての眞夜中であります。

星のまたしく夜空の下に、村々がひっそりと寝静まつた丑三つ頃、戸外に出て見ると、きつと大川堤に明滅する狐の赤い火を望み見る事が出来ます。狐はあの火をどうしてとますのであらう、火をともして毎晩どこへ行くのであらうと、私は子供の時分——今でも不審はそのまゝ持つてゐますが——不思議で不思議でたまりませんでした。

狐の穴はきつと蘆の茂みの中にあるのでせう。晝の間は穴の中にひそまつてゐて、夜になると穴から出て来て火をとますのでせう。私のひいぢいさんは此の川の西の村から大橋を渡つた東の村へ養子に來た人でありました。

末の孫にあたる私の母が、此のおぢいさんの大切に持つて居た桑の杖を欲しがつて、

「おぢいさん、此の棒をあたしに下さらない。」  
とねだると、

「これはな、俺の大事な大事な杖ぢや、いくらおぬしが欲しがつてもこれだけは遣れないよ。」

と言つて、どうしても呉れなかつたさうです。孫があまりねだると、おぢいさんは、

「此の杖がないと、俺は在所（おぢいさんのお里）へ歸れん。大橋を通ると、きつと狐が嫁入をやる。その嫁入の行列を此の杖でぶつたたくのぢやからな。」  
と言つて、にこつと笑つたさうです。

ひいぢいさんは實家へ歸るのに決して晝間は出掛けません。必ず眞夜中を選んで行きました。それも月の明るい晩を避けて、闇夜の、星あかりで田圃道がやつとすかされるやうな夜、のつそりと出掛けました。ふと眼をあげて前方を見ると、堤を無数の赤い火が大橋の方へ點々と列をなして動いて居ます。

「出をつたな。」

と、ひいぢいさんは桑の杖を握り直して、元氣よく暗がりの道で大橋さして運びました。橋の袂にさしかると、向ふの橋の袂へ先頭の赤い火がさしかゝつて居ました。

狐の嫁入り——花嫁は夜目にもしるき金びかのお駕籠の中に、簞笥、長持幾十棹、大小さしたちよん鬘や、ぬひとり模様の裾重たげな御殿女中が、手ん手に赤い提灯さげて、ものも言はず、足音もたてず大橋の上を一ぱいに弘がつて練つて來ます。ひいぢいさんは、

「こらつ、ど狐め、いゝ加減にしるい。」

破れんばかりの大聲でがなつて、桑の杖をふりあげ、手あたり次第になぐり散らすと、ちよん鬘が轉んで、ぬひとり模様がへたばり、お駕籠がひつくりかへつて、長持がころがる。無數の赤い火がぱつと一時に消えて、橋の上の暗がりの中には自分がたつた一人つきり。ひいぢいさんはからからと笑つて、あとは鼻歌でぶらり〜と行くのでした。

「おぢいさん、狐の嫁入をなぜなぐるの、可哀相ぢやないの。」  
隅に言はれて、おぢいさんは、

「なあに、ど狐が人をばかしてゐるのだよ。なぐられても痛くも痒くもないんだよ。」

かう言つて、面白くて堪らなさうに聲を出して笑ふのでありました。此のひいぢいさんが、何時からか大好きな夜道をふつつりと止めてしまひました。

「おぢいさん、もう狐の嫁入をなぐりに行かないの。」

「うん、もう止めたよ。腰が痛くてな。」

孫にはかう言ひましたが、本當は腰が痛いからではなかつたのでした。さしものひいぢいさんも、心の底の底から懲り／＼した晩があつたからでした。と言ふのは、例によつて例の通り、或晩闇を幸、祕藏の桑の杖を握つて、大橋にさしかゝりましたが、どうした事か其の晩に限つて來るべき筈の狐の嫁入がやつて來ません。「はてな」とひいぢいさんは暫くこちらの橋の袂で待合せましたが、一向來かゝる氣配がありません、橋を渡つてしまつても出さうな様子は見えないのでがつかりしてしまひました。

「ひよつとしたら、堤の上で出會ふのかも知れん。」

かう思つて、眞夜中の堤を一二丁歩いて行きました。川水が闇の底で薄く光つて、折からの一陣の風に、蘆の葉がざわめいたかと思ふと、遙かの川上に赤い火がぼかつと一つともりました。

「しめたつ。」

と思ふ間に、其の赤い火は非常な速力で近づいて來ました。茶碗の丸さに、金盃程に、それが見る間に大きな盃のやうになつて、ひいぢいさんに迫つて來ました。しかも其の火の玉の中に、牛とも馬とも分明せぬ顔が一つ、一段と濃い血の色に燃えて、かつと見開いた兩眼の光ものすごく、びゆうつとばかりうなりの尾を曳いて、ひいぢいさんとすれちがひ様に、ぎよろつとにらんだ瞬間ぢいさんを跳ね飛ばし

て遙の川下へ飛んで行つてしまひました。

ころがり落ちたのは流れと反對の田圃の中でありましたが、ひいぢいさんはおど毛をふるつて、堤の上へ這ひ上つて、そつと川下の方を見た時、大火の玉はじいゝつと動かずに、何かの顔の眼玉がひいぢいさんを見据えたまゝで一つ所に止つて居ました。

冷汗を流して、ひいぢいさんは在所の村のとりつきの農家まで辿り着くと、戸をたゝいて人を頼み、實家の門まで送つて貰つたのでした。そして桑の杖などもう何處かへなくしてしまつて居ました。

ひいぢいさんが亡くなつてから何十年と言ふ月日が流れました。末の孫であつた私の母も老婆になつて三年前に世を去りました。さう言ふ私がもう孫に此の話聞かせる齡に近くなりました。大川堤の真夜中の狐火は、今も變りなく神祕の明滅を續けて居ります。